



犬と猫を差別するのはなぜか

やました 山下 ただし 正 イギリス在住・翻訳家

イギリスでは、車で犬をひき殺したら警察に届け出る必要があるが、猫なら不要だ。そりゃ不平等じゃないか、という声が猫陣営から聞こえてきそう。 「いやいや猫だって瀕死の重症を負ったのを見捨てて走り去ったら、動物虐待で訴えられるのは犬と同じである、最低ラインは維持してあるじゃないか」という反論があるかもしれない。うーんでもいまひとつ、差別感はぬぐえない。

実際に、イギリスでは野良犬は割合少ないように思う。もっともクリスマスが過ぎて春になると、捨て犬や捨て猫が急増するといわれている。クリスマスのプレゼントで子犬・子猫をもらった子供たちが、そのうちに飽きてきて捨ててしまうからだ。しかしこういうあわれなペットたちは、RSPCAという王立動物虐待防止団体が收容するので、比較的目につきにくいかもしれない。しかしここもイギリスの刑務所と同じく、お客さんが多すぎて收容能力をオーバーしている。そこで一定の保護期間を過ぎたのは薬殺することになる。そりゃあんまりだ。動物保護に国民的エネルギーをさき、鯨を食べるような野蛮な東洋の国を攻撃しているイギリスとしては、少々自家撞着の責めをまぬがれない。

そこで、ペットの「再利用」を促進しようとい

うことになる。つまりいまはやりのリサイクリングですな。新しく動物を飼いたいという人は、まずRSPCAへ出かけて、捨て犬・猫の中からよさそうなのを物色する。基本的には仕入れ費用は無料だから、再販費用も無料となるべきだが、諸経費がかさむから少々の自発的募金を強要される。しかしブリーダーから血統書つきの高いやつを買うというのは金持ちに任せて、庶民はこちらを利用する。なかなか合理的なシステムではある。日本でもむかし保険所の野犬狩りというのがあったが、いまはどうなっているんだろう。野犬イコール薬殺ということで、日本ではイメージが悪かった。でもイギリスではさすが、できるだけ里親を探すことに努力するのである。

このRSPCAというのは、あちこちにあって、なかなか立派な施設だ。なにしろ英国児童福祉協会よりも早くスタートしたほどの歴史を誇っている。ロンドン郊外のウインザー城の近くの一施設などは大規模で、ちょっとした公園が併設されていて、檻がずらっと並んでいる（数えたことはないが100棟以上はありそう）。ここにはありとあらゆる犬種の犬たちが里親を待っている（犬以外にもいるが）。それぞれ拾われてきたときの状況や犬の性格を記した札がはってある。「飼い主か



ら虐待を受けていた形跡があるので、ちょっと粗暴」とか「噛み付きのクセがあるが、元来はひとなっつこい」とか「孤独を好む」とか書いてある。そして入所した年月日が添えてある。「長逗留組」の能書きを見ていると、なるほどこれじゃ引き取り手がいないわけだ、と納得するものが多い。でも捨て犬だから雑種ばかりだろうと思うかもしれないが、そんなこともない。先日行ったときには立派な秋田犬がいて驚いた。

おっと、犬・猫差別が本題でした。

ともかくイギリスでは犬の方が圧倒的に重用されている。重用というのがおかしければ、社会的に存在感があるとも言えよう。犬と比較すると、猫はまあ、さしみのつま程度の扱われ方である。フランス人は猫が好きで、イギリス人は犬が好き、というのは比較文化のたぐいの本によく載っている話だ。私の知人は「犬はひとに媚びるからキライだが、猫は自立しているからいいのだ」と言う。

この説を敷衍すれば、イギリス人は自己規制する人種だから、犬を家来にして鬱憤晴らしをする。フランス人は自己主張の強い人たちだから、他人のことはわれ関せず。だから猫と相性がいいのだ。というこじつけが可能だろうか。というわけで、

イギリス社会では犬が圧倒的に人気がある。だから猫はようするにどうでもよいのである。動物保護のたてまえ上、猫にもいちおうチャンスを与えておこうか、というところだろう。

最後に、もうひとつ、犬と関連することでももしろいのは、イギリスの階級社会性と関連づけた議論だ。労働者階級が飼うのはボクサー、中産階級はレトリバー、上流階級はビーグルなどが多いというのだ（諸説あるので話半分）。労働者階級はビールを飲んで与太話をするさいの鬱憤ばらしには、ボクサーなどの凶暴なやつがむいている、中産階級はストレスが多いからレトリバーのような人なっつこいのに癒されたい、大金持ちはビーグルなんぞのおとなしいのがよい。。。これらはそれぞれの犬種の性格などを考えるととってももらしい説ではある。

イギリス人が一番好きな、国民的スポーツとしての散歩の友として、犬はなくてはならない存在なのだ。猫に綱をつけて散歩するわけにいかないしな～。こりゃにゃんともしかたない、というオヤジギャグで本日のところはオシマイ。